

# FUKUSHIKEN JOURNAL

「福祉研ジャーナル」

高齢者や障がい者のための施設を専門に設計する、日比野設計+福祉施設研究所が発行するフリーペーパー。今回は「敬老の日」に合わせて、介護施設に関する情報や最新のプロジェクト等を紹介いたします。

vol.01  
**2020**  
TAKE FREE



特別養護老人ホーム グランモールさくら及川

## アフターコロナに 求められる介護の環境

### ソーシャル・ディスタンスと 相反する介護の現場

「ソーシャル・ディスタンスを保ちましょう！」新型コロナウイルスが世界中で流行し、パンデミック状態となった今年3月。その対策として言われるようになったのが、この「ソーシャル・ディスタンス」。人と人との間に物理的な距離を取ることによって人が互いに密接な接触を行う機会を減少させる方法である。しかし、食事・入浴・排せつといった、身体に触れることの多い介護の現場において、利用者との物理的ソーシャルディスタンスを保つことは難しい。介護の現場においても喫緊の課題である「コロナ対策」について、福祉施設専門設計を行う日比野設計+福祉施設研究所の所長 裏木隆（うらぎ・たかし）氏にインタビューをした。

### 1. 自然換気と換気システム

消毒や換気、三蜜を極力避けるなど、どの介護施設でも十分な対策が取られているだろうにもかかわらず、介護施設でのクラスター発生のニュースは少なくない。介護施設の環境を整備する際に、工夫でできることは何かあるのだろうか。裏木氏は、「まずは、部屋の1か所だけに窓を設けるのではなく、対面に窓を設け風を通して自然換気を行うことが基本」であると言った。さらに、現在設計中の長崎の特別養護老人ホームでは、80床のうち2床のみ、換気システムの導入を検討しているということである。この換気システムは、通常の換気とは異なり、より高

性能なフィルターを使用して、きれいな空気を循環させている。万が一施設内で感染が疑われる者が出た場合には、この無菌室へ速やかに移動し生活してもらうことで、感染拡大を避け、クラスター発生を回避できる。また、今回の新型コロナウイルスは、再感染のリスクもあると報告されていることから、完全に回復するまで生活を送る部屋としても使用できる。

### 2. 受付や面会の工夫

また、設計中の介護施設では、「これまで以上に手洗いの徹底の意識が高まっている」という。それに伴い、利用者や来館者の出入り口だけでなく、職員用の出入り口や食堂・交流スペースなど、施設内のあらゆる出入り口付近に手洗い場が設置されるようになってきている。また、従来、外気の流入や風の吹きつけを緩和する目的で建物の入口の前に設けられる「風除室」を利用し、建物の中に入らなくても、利用者ご家族がガラ



ガラス越しに面会できる機能をもたせた風除室（障害者支援施設ステージ桜ヶ丘）



日比野設計+福祉施設研究所 所長 裏木隆（うらぎ・たかし）

ス越しに顔を見ながら会話ができるような空間も検討しているとのことである。家族であっても面会をすることが難しい今、利用者ご家族のストレスも高まっている。こういった面会の工夫により、利用者ご家族の方々がより安心できる「新しい生活」のあり方を整備していくことが大切である。

### 「コロナ禍でも変わらない、 介護施設のデザインにおける 普遍的なテーマとは」

「これまでの介護施設では、いかに利用者・家族・地域の交流が生まれるかというのを考えてデザインしてきた」と話す裏木氏。さらに続けて、「今こうして、物理的な距離を保つことが求められるようになった今も、人や社会と接点を持ち、人の温かみを感じながら生活することに対する価値は変わらない」と語る。「コロナ対策」と「人との交流」は矛盾するテーマと言えるが、感染を防ぎつつ、いかに人との交流を生むかということを環境やデザインを通して解決させていくことが、今後の大きなテーマと言えそうだ。

# 日本全国で相次ぐ洪水災害。 介護施設はどう建てる？

## 救えなかった14人の命

今年6月、熊本県南部を襲った記録的豪雨で、球磨村にある特別養護老人ホームが水没し、入居者14人が死亡するというニュースがあった。避難訓練を重ねてきたのにもかかわらず、なぜこのような惨事が起きてしまったのか。その一つの理由として、施設の建て方があるという。日比野設計+福祉施設研究では、介護施設を建てる際、どんなことを気をつけているのだろうか。

## 敷地の選定は慎重に

第一に問題となるのは、敷地の選定である。施設整備において、建物の建設に対する補助金はあっても、土地を購入する補助金はない。また、施設整備ではまとまった面積の土地が必要になってくるため、地価の高い市街地や条件の良い場所は建てられないことが多い。そこで大切なのは、敷地選定の段階から専門的な目



気軽に立ち寄れる地域コミュニティスペース（シーサイドポート横浜金沢）

で検討することである。地盤や地形、周囲の環境など、目に見えない土地の要素を総合的にみることで、災害が起こりにくい土地を選ぶことができるということである。

## 適切なフロア配置を

特別養護老人ホームの場合、自力で避難できる利用者はほとんどいない。7月11日の朝日新聞の記事によると、今回被災した熊本県球磨村の施設では、入居者70人を1階から2階に運び上げたという。また、車椅子の入居者を1人上げるのに、4人がかりで1〜2分かかり、40人ほど上げたところで浸水が始まってしまったということである。

では、入居者がより安全に安心して生活するためにはどうするべきだろうか。現在、日比野設計+福祉施設研究所で計画中の横浜市の特別養護老人ホーム「シーサイドポート横浜金沢（仮称）」は、海岸近くのエリアにあり、津波による浸水が想定



3階以上に入居者の生活スペースを配置（シーサイドポート横浜金沢）



地域に開放された中庭の完成予想図（シーサイドポート横浜金沢）

される地域である。そのため、1階は地域コミュニティハウス、2階は管理室とデイサービス、そして3階以上に入居者のための生活スペースを配置している。

地域ごとに、どのような災害のリスクが高いかを判断し、適切なフロア配置を行うことも、災害対策となり、入居者が安心して生活することが可能となるのである。

## 地域の福祉避難所として

さらに、この「シーサイドポート横浜金沢（仮称）」では、地域の福祉避難所としての利用も意識しているのだそう。福祉避難所とは、高齢者や障がい者、その他の特別な配慮を必要とする方々を受け入れるための設備・器材・人材を備えた避難所施設のこと。通常、避難所として指定されている小学校や中学校はこうした設備が十分でないことが多い。そのため、既にあらゆる設備が整っている特別養護老人ホームは、地域の福祉避難所として重要な役割を担っていると言える。日本全国で異常気象による災害が絶えない今、地域の福祉避難所として防災への意識や普段からの周知を行い、福祉施設が地域と共に共存していくことが大切になっていくだろう。

# ‘FUKUSHIKEN’ NEW PROJECTS

「福祉施設研究所」の過去のプロジェクトはウェブサイトでも公開中！



## 「温泉と人生を楽しむ保養地」

— 特別養護老人ホーム 湯楽苑 / 長崎、日本

長崎県の「特別養護老人ホーム 湯楽苑」の改築プロジェクト。この地域は、昔から国民保養温泉地として親しまれてきた。この地域の歴史を振り返り、人生の最期まで存分に温泉と人生を楽しむことができるように、と計画が始まった。全ての居室から海を見ることができ、利用者もご家族にとって心地よい生活空間となっている。また、海が一望できる足湯のスペースは、利用者だけでなく来館者も楽しむことができ、共にゆっくり安らげる時間を過ごすことができる場所となっている。



## 「原風景と暮らす」

— (仮称) 障害者支援施設ステージ桜ヶ丘及び小規模多機能型居宅介護事業所南風 / 高知、日本

高知県の障害者支援施設と小規模多機能型居宅介護事業所の改築プロジェクト。利用者同士の交流が生まれる「菜園スペース」、爽やかな香りを放つ「柚子の庭」、気軽に外に出て太陽にあたることのできる「天日デッキ」、地域住民をつなぐ地域交流スペース等々、地域の特性を活かし、施設の中でも地元の魅力ある風景を感じながら暮らすことができるようにと計画が進んでいる。目の前に海が広がる高台の土地であることから、津波が起きた際には、地域の福祉避難所としても開放することができるよう設備が整えられている。

